

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科)(2022.12)令和4年度:

,

# 「就学前のダウン症児を育てる母親の育児に及ぼす影響因子に関する文献研究」

学生氏名 竹田佳央 松岡萌々香 和田萌々子

(指導:山内まゆみ)

## 緒言

晩産化が進む日本<sup>1)</sup>では、加齢による染色体異常がある出産の頻度が増し<sup>2)</sup>、近年、ダウン症児の出生率は増加している<sup>3)4)5)6)</sup>。日本の育児の課題に孤立化<sup>7)</sup>があり、ダウン症児を育てる母親の養育過程においては母親の育児困難感が強く<sup>8)</sup>、「閉じこもり」をはじめとした精神的危機状態に陥るなど<sup>9)</sup>、障害児虐待のリスクが高い<sup>10)</sup>。

そこで本研究の目的は、先行研究からダウン症児を育てる母親の育児に影響を及ぼす要因を明らかにすることとし、それによってダウン症児の育児に関する支援を考える一助とする。

## 研究方法

### 研究対象文献

研究対象文献は、研究対象者が就学前のダウン症児(以下、ダウン症児)をもつ母親で、育児への影響について述べられている原著論文とした。文献検索は、医中誌 Web 版 Ver.5 を使用し、基本キーワードを「ダウン症」と「母親」とし、以下の3手順で検索した。基本キーワードに、①「親子関係」「養育過程」「受容過程」「患者会」「自助グループ」から1ワード掛け合わせ、②「育児」を追加キーワードに「影響」「支援」「精神遅滞」「社会参加」「地域」から1ワード掛け合わせ、③「身体」「影響」を追加キーワードにしての検索とした。抽出された文献104件中、重複するもの35件、2021年から過去15年以前の文献28件、調査対象がダウン症児の母親ではない16件を除外し、その結果25件(和文献22件、英文献3件)を研究対象文献とした。

### 分析方法

対象文献の発行年次推移の動向を概括した。次に、文献内容を精読し、ダウン症児の母親の育児への影響が述べられた箇所を抽出し、意味合いから分類し、育児にどのような影響を及ぼすのかをまとめた。

### 倫理的配慮

公表中の文献のみを用いて筆者の意図から逸脱しないよう適切に引用することで信頼性を確保し、文献の出典を明記することで著作権を侵害しないように配慮した。

## 結果

### 1. 研究の動向

2007年から2021年の発行年次推移は、ほぼ毎年研究報告があった。

### 2. 分類結果

文献の精読、内容の分類を行った結果を4つに分類し、母親の心理・行動の変容過程に関する研究18件、障害者自立支援法に関する研究1件、母親のニーズに関する研究2件、母親の心理・身体・育て方に関する研究4件とした。

### 1) 母親の心理・行動の変容過程に関する研究

母親の心理・行動について、変容過程の明確化とその過程に影響する因子に集約できた。変容過程を明確化した報告は3件で、母親は「分離」「移行」「再統合」の3段階の体験を経て心理的に変容し社会参加に向かうこと<sup>11)</sup>、夫や周囲からダウン症児の出産を受け入れられる体験により、ダウン症児の親になることを受容すること<sup>12)</sup>、ダウン症を含む先天性疾患を持つ母親は現実を受け入れようとする「適応」から児の障害を受け入れる「再起」までの1年間は心理的に不安定である一方で、子どもと接することが愛情を強め、子どもに対し早期に肯定的感情を持つこと<sup>13)</sup>であった。

次に、ダウン症児の合併症の有無による変容過程の影響因子についての報告は2件で、合併症がある場合は「障害」と「普通」をめぐる揺らぎの中でも生死をめぐる揺らぎの経験が最初にあること<sup>14)</sup>、ダウン症を含む母親の自己と他者との関係(ポジショニング)の変容過程は「再生」「逃避」「獲得」「境界」の4つの過程があり、影響要因は、医師の説明や告知の内容、子どもの病の特性、わが子が障害であるという認識、子ども、家族、社会的ネットワーク(友人、近隣・地域、障害のある子どもをもつ母親)であった<sup>15)</sup>。

また、他の影響因子の報告は13件であった。父親を代表とした家族の存在<sup>16)</sup>、医療者の支援<sup>17)18)</sup>、早期療育における障害のある乳幼児をもつ母親同士のグループワーク<sup>19)</sup>、親仲間の存在<sup>20)</sup>、社会の反応の程度<sup>21)</sup>、SNS<sup>17)</sup>の存在は、育児負担感の減少や愛着感情の上昇、成長の実感、安心感を得ることに影響するとした。

医療者の支援では、入院中の褥婦に対する看護者の支援として、親子関係形成へのケア<sup>22)</sup>と母子同室に関するケア<sup>23)</sup>が影響した。母親は「わが子に対する理解を助ける支援と情報共有」「看護師の態度」を肯定的に認識し、「愛着形成を促す支援」は低い認識だった。一方、母児同室時の直接授乳できているというプラス面に着目し、児とのふれあいの時間にするよう意図的な支援、児らしさを母親に伝える支援は、母親の不安の軽減、育児への自信を高めた。乳幼児期の支援では、ベビーマッサージは、母子双方の反応性や応答性、母親からのマタernal・アタッチメントを高め、母子相互作用を促進し<sup>24)</sup>、すくすく外来や赤ちゃん体操による早期介入では、育児負担感の減少、母子間愛着感情の増加、他の母親やダウン症児との出会いによる安心感を得ていた<sup>25)26)27)28)</sup>。

### 2) 障害者自立支援法に関する研究

障害者自立支援法の導入後に発生したサービスの、利用に関する情報不足、自己負担額の増加により、サービス利用量が減少し養育負担感が上昇<sup>29)</sup>した。

### 3) 母親のニーズに関する研究

母親のニーズに関する報告は2件あり、医療者に対してはダウン症児の特徴に理解を示してほしい、母親の思いを傾聴してほしい<sup>30)</sup>、父親向けに子どもへの直接的な関わりや両親向けに育児や療育する機会を増やしてほしい、父親に対しては育児のパートナーである母親の身体・精神面にも目を向けてほしい<sup>31)</sup>というニーズがあった。

### 4) 母親の心理・身体・育て方に関する研究

母親の心理・身体・育て方に関する報告は4件で、ダウン症児の母親は、QOLが低かった。健常児の母親との比較では、精神状態が悪い<sup>32)</sup>とする報告、有意差がない<sup>33)</sup>とする報告に分かれた。ダウン症児の母親は、精神・運動・両方の発達障害をもつ母親と比較し身体能力と抑うつ症状への影響が少なかった<sup>33)</sup>。また、ダウン症児を含む障害児の母親は、健常児の母親と比較し子育てレジリエンスは低く、児や育児への拒否感情が高まり、障害種別の比較では、ダウン症、自閉症、知的障害の順に子育てレジリエンスが低下する<sup>34)</sup>とした。

母親の育児行動に関する日本と台湾の比較では、「母親の指示」、母親の「指示的質問」は子どもの言語発達を阻害し、それは台湾では子どもの行動上の問題に影響するが日本ではしなかった。日本では母親の接し方が、母親自身からの発話か子どもへの応答かにより子どもの行動上の問題の発生に影響を与える<sup>35)</sup>とした。

## 考察

ダウン症児をもつ母親の育児への影響に関する25文献をレビューした結果、ダウン症児の母親は「分離」「移行」「再統合」の段階を経て心理的に変容すること、現実を受け入れようとする「適応」から児の障がいを受け入れる「再起」までは約1年かかることが明らかになった。産褥早期の母親となるプロセスについて、ルービン<sup>36)</sup>は、「受容期」「保持期」「解放期」の3つの段階で説明している。受容期は産褥1~2日目にあたり、母親自身が受容的で依存的な態度を示す時期、保持期は産褥3~10日間にあたり、自立的な状態に移行する段階、解放期は産褥10日~1か月にあたり、子どもの母親であること、すなわち母親役割を受け入れていく時期である。このことから、ダウン症児の母親の変容過程では受容の期間が健常児の母親と比較して長く、時間をかけて児がダウン症であることや自分がダウン症児の母親であることを受容し、母親役割を獲得していくことが特徴であると考える。研究結果より、この変容過程に影響を与える因子は、医療者の支援、子どもの病の特性や認識、父親を代表とした家族の存在、周囲の反応や親仲間の存在・活動などの社会的ネットワークであった。これらの影響因子は、働き方によって育児のしやすさと育児のしにくさのどちらにも影響する。良い影響を与える働きを促すために、医療者の支援として、母親の受容段階に合わせてダウン症に関する情報提供や愛着を促進する支援、情緒的サポートを行うこと、母親だけでなく父親をはじめとする家族にも同様の支援を行うことが効果的であり、母親が児と児の母親であることを受容することにつながると思われる。

## 結論

1. 母親になる過程において、ダウン症児の母親は、健常児の母親と比較して時間をかけて児と児の母親であることを受容していく。
2. ダウン症児をもつ母親の育児へ影響を及ぼす要因は、医療者の支援、子どもの病の特性や認識、父親を代表とした家族の存在、周囲の反応や親仲間の存在・活動などの社会的ネットワークである。
3. 母親の受容段階に合わせた情報提供や愛着を促進する支援、心理的な支援を行うことが、母親が児と児の母親であることの受容に効果的である。

## 引用文献

- 1) 小田清一,他編(2020):国民衛生の動向・厚生指標,増刊,67巻9号,58,厚生労働統計協会
- 2) 古川誠志(2016):高齢妊娠に伴う諸問題,杏林医会誌,47巻1号,77-79
- 3) 厚生労働省:平成18年人口動態統計(確定数)の概況, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei06/hyo1.html>(2022-4-11)
- 4) 厚生労働省:平成28年人口動態統計(確定数)の概況, [https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei16/dl/03\\_h1.pdf](https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei16/dl/03_h1.pdf)(2022-4-11)
- 5) 国立成育医療研究センター: [https://www.ncchd.go.jp/press/2019/pr\\_20190809.html](https://www.ncchd.go.jp/press/2019/pr_20190809.html)(2022-9-18)
- 6) 小児慢性特定疾病情報センター:染色体又は遺伝子に変化を伴う症候群の疾患一覧, [https://www.shouman.jp/disease/details/13\\_01\\_014/](https://www.shouman.jp/disease/details/13_01_014/)(2021-9-18)
- 7) 労働省・健やか親子21推進協議会: [http://sukoyaka21.jp/pdf/sukoyaka21\\_leaflet2017.pdf](http://sukoyaka21.jp/pdf/sukoyaka21_leaflet2017.pdf)(2021-9-19)
- 8) 渡邊タミ子,他(2000):ダウン症候群児のいる母親の療育困難と人的サポート,山梨医大紀要,17巻,58-63
- 9) 一瀬早百合(2010):障害のある乳幼児に不適切な養育が生じるプロセス—事例研究を通じて—,社会福祉,51号,53-65
- 10) Sullivan P.M,Knudson J.F(2000):“Maltreatment and disabilities: a populationbased epidemiological study”,Child Abuse and Neglect,24(10),1257-1273
- 11)~35)表1「引用(研究対象)文献リスト」参照
- 36) ルヴァ・ルービン(1997):母性論 母性の主観的体験(新道幸恵,後藤佳子訳,東京医学書院

表1「引用(研究対象)文献リスト」

引用(研究対象)文献	タイトル
11)	西方信一,他(2020):障害のある子どもと母親の社会参加—Interactionの視点から—,作業科学研究,14巻1号,31-40
12)	西平朋子,他(2014):ダウン症の子をもつ母親が子どもを受け入れていくプロセス—ダウン症児の親になることへの受容—,沖縄県立看護大学紀要,15巻,67-75
13)	深谷久子,他(2007):先天奇形を持つ子どもの親の出産および子どもに対する反応に関する記述研究,日本産科婦科学会誌,13巻2号,2-16
14)	園橋子(2010):ダウン症の子をもつ母親の「障害をめぐる揺らぎ」のプロセス—障害のある子どもを持つ母親の主観的経験に関する研究—,社会福祉,51号,67-87
15)	一瀬早百合(2011):障害のある乳幼児をもつ母親の変容プロセス—早期の段階における4つのストーリー—,社会福祉学,52巻2号,67-79
16)	芳賀亜紀子,他(2017):ダウン症候群の子を受け入れて育てる育児経験のある両親1組の思い—父親が育児休業を取得中にダウン症候群と診断された関わりを通して—,長野県母子衛生学会誌,19
17)	片田千尋,他(2016):ダウン症児の母親が育児に前向きな気持ちになるまでの心理過程,医療者の支援とソーシャルメディアが母親の心理に与える効果,兵庫医科大学紀要,4巻1号,1-8
18)	小池美穂,他(2014):先天性心疾患を持つダウン症候群の子を産み育てる母親の思いと親の会への参加,日本遺伝看護学会誌,12巻2号,33-43
19)	一瀬早百合(2011):早期療育におけるソーシャルワーク—グループワークを中心に—,社会福祉,52巻,61-78
20)	石藤みちる,他(2014):ダウン症候群のある乳幼児を育てる母親が親仲間との経験を生かし社会化する過程,日本遺伝看護学会誌,12巻2号,18-32
21)	川崎裕美(2012):ダウン症候群の子どもの母親の思いを支える継続支援のあり方—出生から小学校進学までのインタビューから—,日本遺伝看護学会誌,10巻2号,10-14
22)	竹内久美子,他(2015):ダウン症の診断確定を待つ新生児期の親子関係形成ケアに対する母親の認識,山口医学,64巻2号,87-99
23)	兵庫総合(2013):母児同室入院における効果的な援助—ダウン症児をもつ母親との関わりを通して—,日本看護学会論文集,小児看護,43号,11-14
24)	篠原実恵,他(2021):ベビー・マザー・サークルがダウン症候群の乳児と母親の相互作用に及ぼす効果,家族看護学研究,26巻2号,151-160
25)	植田紀美子,他(2017):Down症候群をもつ乳児とその家族に対する集団外来の取り組み,日本小児科学会雑誌,121巻1号,1872-1878
26)	尾崎由美,他(2014):赤ちゃん体操教室の現状と今後の課題—お母さんへのアンケート調査より—,日本ダウン症療育研究,7号,30-32
27)	黒田舞,他(2013):集団外来における臨床心理士のかかわり,埼玉小児医療センター—医学誌,30巻1号,143-147
28)	植田紀美子,他(2011):ダウン症候群総合支援外来の患者および家族に対する効果に関する複合研究,大阪府母子保健総合医療センター—雑誌,21巻1-2号,46-52
29)	松澤明美,他(2013):障害者自立支援法導入による在宅障害児—者の母親の養育負担感の変化とその関連要因,小児保健研究,72巻1号,54-64
30)	金泉志英,他(2013):乳幼児期のダウン症候群児をもつ母親の育児の実態と思い,小児保健研究,72巻1号,72-80
31)	長嶋聖子(2006):ダウン症児の母親が期待する父親の役割,日本地域看護学会誌,11巻1号,68-75
32)	Muhammer Rasmi,他(2013):The Depressive Symptoms and Physical Performance of Mothers of Children with Different Types of Disability, Journal of Physical Performance Science,23巻3号,263-266
33)	Dine Gulser Senses,他(2019):Mothers of 0-3-year-old children with Down syndrome: Effects on quality of life, Pediatrics International,61巻9号,865-871
34)	尾野明夫,他(2011):障害児をもつ母親の子育てレジリエンスに関する研究,心理学研究,2巻,67-77
35)	Su-fen Huang,他(2007):Mother's Interactions With Their Children With Down Syndrome in Taiwan and Japan: Maternal Conversational Style, Behavioral Problems, and Children's Expressive Language